

クライストの『ミヒヤエル・コールハース』における「見通しの悪さ」*

杉 林 周 陽

序

1) 『ミヒヤエル・コールハース』の成立とその冒頭部分

『ミヒヤエル・コールハース』(以下『コールハース』)は、ハインリッヒ・フォン・クライストの散文作品の中で突出して長大なものである。そのサブタイトルに „Aus einer alten Chronik (ある古記録より)” とあるように、ある史実から題材を得ている。クライスト研究者であるヘルムート・ゼムトナーによれば、1540年にハンス・コールハーゼという人物が起こした事件に関する記録が1731年に出版されており、どうやらクライストはこれを見たのではないかと推測されるという。この古記録はレクラム版で約8ページの分量にしかならないが、それを簡単に要約すると、以下のような内容になる。

ハンス・コールハーゼは誠実な男であり、裕福な商人であった。彼は商用で出かけた折、連れていた馬が盗まれた馬であるとの言いがかりのあるユンカーにつけられ、その内の二頭を不当に奪われた。そればかりか、奪われた馬は酷使され、全く売り物にならなくされた。これに対しコールハーゼはユンカーに馬の損害賠償を要求し訴訟したが、彼の訴えは退けられた。そのため彼はユンカーとその領主であり、コールハーゼの訴えを退けたザクセン公に戦いを仕掛け、ザクセン領内を荒らし回った。しかし最後には捕らえられ、平和を乱した廉により仲間共々処刑された。

このコールハーゼの事件を題材とした『コールハース』は、1808年にアダム・ミュラーと共同で出版した文芸雑誌『フェーブス』に断片が、1810年に完成稿が彼の『小説集』第一巻に収められ、出版された。

ここで物語冒頭部分を見てみることにする。

ハーフェル河のほとりに16世紀の中葉、ミヒヤエル・コールハースという名の馬喰が住んでいた。ある学校教師の息子で、その時代の最も誠実であると同時に最も恐ろしい者の一人であった。――この異常な男は三十歳になるまでは、良き市民の模範と見なされただろう。彼はある村に農場を持っていたが、その村は、今なお彼に因む名を持っている。そこで彼はその生業によって静かに暮らし、彼の妻が産んでくれた子供たちを、神への畏敬の内に、勤勉で誠実な人間に育てた。彼の隣人たちの内に、彼の慈悲深さと公正さの恩恵に浴さなかった者は一人もいなかった。要するに、もし彼がある美德の中で逸脱しなかったならば、世間は彼の思い出を讃えたに違いない。

しかし正義の心が、彼を盗人と人殺しにしたのだった。¹⁾

物語冒頭では「16世紀の中葉」と物語の時間枠、すなわち物語が展開する時代の始まりとなる時点が示されている。さらに「その時代の最も誠実であると同時に最も恐ろしい者」と、コールハースの人物像についても語られており、コールハースが相反する要素それぞれの極を持っていることが示されている。事実、彼は三十歳になるまでは良き市民の模範であるが、その後、盗人と人殺しになっていく。こうしたコールハースの変化を踏まえて、「その時代の最も誠実であると同時に最も恐ろしい者」という評価がされている。さらに「正義の心が、彼を盗人と人殺しにしたのだった」という部分からは、読者は今後、コールハースが彼の正義感の強さのために「最も恐ろしい」人物へなっていくことを知る。ここで示されているコールハースの変化は、物語の今後の先取りとなる。物語冒頭の内容から、我々読者は「盗人と人殺し」になるコールハースがある美徳の中で逸脱したために、世間が讃えられない思い出になったことを知る。つまり、彼は最後には犯罪者として処刑される運命なのだろうと、物語の展開に対する見通しを持つことができる。

物語序盤ではこの見通し通りに物語が展開する。狼藉を働き、「盗人と人殺し」になったコールハースは処刑という運命に向かって進んでいくのだが、コールハースの暴動を止めるためにマルティン・ルターが登場し、コールハースと会談する場面に境にして、彼には大赦が与えられ、それによって処刑が回避される。このとき、読者が物語の展開に対して持っていた見通しは不明瞭になる。

2) 研究史

「これまで根本的な、物語を構造している要因について注意が払われてこなかった。すなわち主題である法律上の争いが独特の構造を有しているということである。物語の筋はこの争いから始まり真実の追求（支配的な文学モチーフ）を目指すのではなく、権利を求め、見出すことを目指している。」²⁾ このクラウス＝ミヒャエル・ボグダルの指摘に見られるように『コールハース』の一側面として個人の権利など、法的問題が採りあげられることがある。「この作品の完成稿が書かれた当時、1808年から1810年の間、ヨーロッパにおいて議論を呼ぶ法哲学的な問題だったが、政治的抵抗の合法性だった。中世の国家とは逆に、初期近代社会はもはや自教行為を考慮することはなかった。なぜならば、国内の平定の意味においては、権力の独占が国家組織の中で、国外に対しては軍、そして国内に対して警察で起きていたからである。『自教行為と権力の独占、これが憲法上の歴史的背景であり、この観点から《コールハース》を読むことができる。』³⁾ さらに、この作品に見られる作者クライスト自身の法的知識は、彼の役人として働いた経験と大学で学んだ法学知識との関連が考えられる。

またヴォルフ・キットラーによると、クライストは中世的な私闘の権利の規範をかなり尊重していたという事実もあるようである。そして「クライストはいかに人々がパルチザンとして振る舞うかということ非常に具体的な出来事に際して引き合いに出している。しかし彼はまた、人々がどの

ような過ちを犯しうるのかも示している。」⁴⁾ このキットラーの言及の背景には、ナポレオン戦争を見ることができる。クライストがナポレオンを憎んでいたことは有名であり、『コールハース』においても、彼に加担したザクセン選帝侯に対する憎悪が現れているように読み取れる部分がある。

このように、クライストがこの作品の主人公のモデルとしてコールハーゼを選んだ理由として考えられるものがいくつかある。それらは全て、クライスト自身が持っている社会に対する不満を体現する人物としてコールハーゼが選ばれたのだと考えている。⁵⁾ 確かにそのような理由も考えられる。しかし、クライストがコールハーゼを選んだ理由は他にもあるのではないか。

1731年に出版された古記録はレクラム版で8ページ程度の分量しかない。この古記録を始めとするコールハーゼにまつわる話を基に作られたこの物語内容のほとんどがクライストによる創作によると思われる。その創作部分では物語が古記録『コールハーゼ』の内容からは遠く離れている。その部分の始まりとなるのがコールハースとルターが会話をする場面である。これ以降、「いわゆる語り手の視点が変わる速度が増し、物語の時間面での連続は二回のいわゆるカットバックによって断たれている。」⁶⁾ このような変化が物語の途中から起こることによって、読者はその変化が起こる以前までとは違う読み方をせねばならなくなる。本稿ではまず、上記のような変化によって強制的に変えられる読者の物語に対する見通しの変化を、物語に沿って具体的に検証し、最後にこのことと『コールハース』を通じてどのようなクライスト個人の特徴を読み取ることができるか考察することにする。

1. 事件の契機

まず物語の導入とも言うべき部分を見ていくことにする。この部分には古記録の内容に対応する部分が多々あるが、コールハースの妻リスベトの死という対応しない部分もある。妻の死が引き金となり、彼は「盗人と人殺し」への道を歩み始める。

馬を売り買ひして生計を立てているコールハースは、あるとき商用でブランデンブルク領からザクセン領へ出かける。その途中、ユンカー、ヴェンツェル・フォン・トロンカの所領トロンケンブルクにやってきたコールハースは、今まで見たことも無い検問所で止められ、通行証の提示を求められる。全く聞いたことも無い話であるため、彼は何かの間違いではないかと主張するが認められず、ザクセンの首都ドレーズデンで通行証を発行してもらうことを確言し、通行証を持って戻ってくるまで、抵当として黒馬二頭を、さらにその番として牧童ヘルゼもトロンケンブルクへ残していくことにする。果たしてコールハースの主張した通り、ドレーズデンで通行証のことは間違いであると知ったコールハースは、商用を済ました後、再びトロンケンブルクへと戻ってくる。ところが、そこにはヘルゼの姿は無く、二頭の黒馬もコールハースが連れていたときとは比べものにならぬほど痩せこけているのを見る。その理由を問うてみたところ、ヘルゼが無礼を働いたためにヴェンツェル・フォン・トロンカの城から追い出されたということ、さらに、折しも収穫の時期であったために、黒馬たちはその作業に駆り出されたことが明らかになる。この事実を到底承服できないコールハースは、馬の原状回復

を求めるが容れられず、憤慨した彼は白黒をはっきりさせることになるだろうと確言し、馬を残したままトロンケンブルクを後にする。こうして争いの種は蒔かれたのである。

故郷に戻ったコールハースは、ヴェンツェル・フォン・トロンカの手の者によって虐待され、深手を負わされた挙げ句に逃げ帰ってきていたヘルゼを尋問し、この一件に関しては彼に罪が無いこと、馬はユンカーたちによって不当に奪われ、疲弊させられたことを確認する。ここに至り、コールハースはユンカーの不正をザクセンの法廷に訴える決意をする。それを彼の妻リスベトは「神の御業であろう ([...] daß es ein Werk Gottes wäre, [...])」⁷⁾ と言う。ところが彼の訴えは、ザクセン宮廷の中枢にいるヴェンツェルの親戚によって握りつぶされる。そこでコールハースは自分の領主、ブランデンブルク選帝侯に仲裁を求めて嘆願書を提出するが、またしてもヴェンツェルの一族の者によって妨害され、その訴えは退けられる。

事ここに至り、コールハースは力づくでも自分の訴えをユンカーに認めさせる決意を固め始める。その手始めとして、必要な資金を集めるために、彼は自分が持っている土地家屋を売却する。その交渉の場を目の当たりにした彼の妻リスベトは、夫がただならぬ決意を持って事に当たろうとしていることを察する。夫が行おうとしていることの危険性を感じ取ったリスベトは、それを何とか回避しようと、ブランデンブルクの宮廷に旧知の者がいることを口実として、夫に対し、自分にブランデンブルク選帝侯に嘆願書を届けさせてくれるようお願い出る。妻に嘆願書を託し、今一度、司法の手による裁きがユンカーに下されることを期待したコールハースであったが、その期待は最悪な形で裏切られることになる。

残念ながらリスベトは選帝侯に目通り叶わず、嘆願書は奪われ、そればかりか瀕死の重傷を負って戻ってくる。彼女の今際の際に牧師がベッドの傍で彼女のために聖書の一節を読んでやっていると、リスベトは牧師の手から聖書を取り、夫に「汝の敵を赦し、汝に仇するものにも善をなせ。(„Vergiß deinen Feinden; tue wohl auch denen, die dich hassen.“)」⁸⁾ という一節を指し示し、心のこもった眼差しで夫を見つめ、その手を握りしめ、そして事切れる。しかしながら、彼女の死後に返書としてベルリンから届けられた決議文のあまりにも無情な内容によって、またしても訴えを退けられ、合法的手段によって自分の訴えを聞き届けてもらうことが不可能だと悟ったコールハースは、ついに武器を手に立ち上がる。

因みに『小説集』に先行して1808年に雑誌『フェーブス』に掲載された断片は、この部分までであった。

2. 『コールハーゼ』から『コールハース』へ

1) 大天使ミヒャエルの代行者

クラウス・ミュラー=ザルゲートによると、『コールハース』を舞台作品として見なすならば、五幕に分けることが可能であり、その中の第二幕は武器を手にしたコールハースがトロンケンブルクを襲

撃するところに始まり、これから考察するコールハースとルターとの会談で終わる。⁹⁾

「第一幕」において、コールハースの妻の死が決定的要素になり、彼はヴェンツェル・フォン・トロンカに対する復讐劇を開始する。この復讐劇にコールハースが熱狂していく様が「第二幕」において描かれているのだが、彼の復讐劇に対する熱狂の度合いが宗教的モチーフを用いて示されている。

ところで、物語の舞台となる16世紀は宗教改革の時代として知られており、ルターはその改革の中心人物として有名だが、既に示しているように、彼は『コールハース』でも重要な人物として登場する。舞台に選んだ16世紀という宗教改革の時代背景が、以下で考察の対象としている「裁きの天使」や「大天使ミヒヤエル」などの宗教的モチーフの中に浮かび上がってきているのだと考えられる。

「かくして裁きの天使が空から舞い降りる (Der Engel des Gerichts fährt also vom Himmel herab)」¹⁰⁾ という一文によって始まる復讐劇にコールハースは次第に熱狂していくが、その熱狂の度合いは、彼がしたための布告の中から読み取ることができる。

その布告の中で、この国において彼が遭遇したことを手短かに説明した後で、彼の表現したままを示すと「全キリスト教徒に対し、手付け金とその他の戦利品を与えるという誓約のもとに、ユンカー、フォン・トロンカに対する私の係争事件を、全てのキリスト教徒共通の敵に対するものと思ふべし」と要求した。その後すぐに出た布告において、彼は自分を「帝国と世界には従わず、ただ神にのみ服従する者」と呼んだ。¹¹⁾

この布告の中に見られる文言と語り手の「病的な、そして誤って作り出された妄想 (eine Schwärmerei krankhafter und mißgeschaffener Art)」¹²⁾ というコメントからは、コールハースが復讐劇に熱狂しつつある様が窺える。ここで彼はフォン・トロンカを「全てのキリスト教徒共通の敵」と呼び、自分を「ただ神にのみ服従する者」と呼んでいる。彼が従うのは「全てのキリスト教徒共通の敵」であるフォン・トロンカを罰する神だけなのだ。ところがこの次にコールハースが撒く布告では、彼は上の布告中の存在とは別の存在になっている。

彼はその折に撒いた布告の中で、自らを「このユンカーとの係争事件において、ユンカーの味方をする者全てに対し、全世界が陥っている奸計を、炎と剣をもって罰するために降り立った大天使ミヒヤエルの代行者」と呼んだ。その際、奇襲して落とし、根城としているリュッツェンの城から民衆に対し、世のより良き秩序をうち建てるため、彼に従うよう呼びかけた。そしてこの布告は「我らの臨時世界政府の所在地、リュッツェンの本城より布告す」と熱狂の度が過ぎたやり方で署名されていた。¹³⁾

「熱狂の度が過ぎたやり方」と語り手がコメントしているように、ここではコールハースが復讐劇

に過度に熱中している様子が示されている。ここに至り、彼は自分を「神のみに服従する」存在ではなく「全世界が陥っている奸計を、炎と剣をもって罰するために降り立った大天使ミヒヤエルの代行者」と見なしている。

これまでは神にのみ従う存在であったコールハースが、ここでは自分が天使の代行者であると考えているため、この世に「より良き秩序をうち建てするため」自分に従うよう民衆に呼びかける。前者の布告を書いたとき、彼にとって世界は彼が従わないものであったが、ここでは「世のより良き秩序をうち建て」ようとしているところから窺えるように、世界は彼自身に従わせるものへと変わっている。そればかりか彼は「世のより良き秩序をうち建て」ることで、世界を作り直そうとしているとさえ読むことができる。

2) 「ルター」の果たす役割

このように彼の熱狂の度合いが頂点に達したとき、古記録においてコールハーゼの狼藉を止めようとしたのと同じように、コールハースの狼藉を止めるためにルターが登場する。

一方的にコールハースを糾弾し、彼にヴェンツェル・フォン・トロンカを赦してやるよう迫る『コールハース』のルターは、ミュラー=ザルゲートが言及しているように、「コールハースの懺悔と正餐を巡る頼みを世界から係争を取り除くために道具として利用しようとするところから見て、古記録のルターに反してクライストのルターは宗教的なものと政治的なものとを混在させている。」¹⁴⁾ 「とは言え、コールハーゼとルターの話し合いは、クライストのルターとコールハースの話し合いよりも非常に友好的である」¹⁵⁾ ことは、以下の古記録の引用からも明らかである。

そこでルターはコールハーゼを中に入れ、こっそりと自分の部屋へと連れて行き、フィリップ、クルキガー、マヨール、そして他の神学者たちを自分の下へ呼んだ。ルターの部屋でコールハーゼは彼らに事の全てを伝え、夜遅くまでルターのところにいた。次の日の朝、コールハーゼはルターに懺悔をし、尊ぶべき秘跡を受け、そしてルターたちに対し、計画の放棄と、これ以上ザクセンに危害を加えないことを約束した。¹⁶⁾

『コールハース』のルターが古記録のルターとは異なって描かれていることと対応するかのようにより、コールハースとルターの話し合いの結果も異なっている。古記録の著者ペーター・ハフティッツが「コールハーゼとザクセンとの間の争いを平和に解決させるためのルターの努力は明らかな失敗に終わったと書いているのに対し、クライストのコールハースは、ルターの仲介によって自由なる護送を得、彼の法律問題を秩序に従って争うことができるようになる。」¹⁷⁾ 古記録ではルターの仲裁も実らず、ザクセン選帝侯の追跡を受け続けるコールハーゼは、彼に味方してくれていたブランデンブルク選帝侯までも敵に回し、最後には処刑される。ところが『コールハース』ではルターの仲裁によって、

コールハースはザクセン選帝侯から彼が犯した罪に対する大赦を得、古記録にあるような処刑を回避するばかりか、彼が何度も起こしていたヴェンツェル・フォン・トロンカに奪われた馬に関する訴えの再審理さえも認められる。このルターの仲裁を巡る部分では、古記録には全く出てこない出来事が述べられている。冒頭で述べたように、『コールハース』のほぼ真ん中にあるルターの場面からコールハースが処刑される結末までの間には、クライストが創作した内容がそれ以前よりも多く見られる。そしてそこでは物語を著す手法もまた、それ以前とは異なった特徴を持っている。

3) 物語の変化

前節に示したコールハースとルターの会話の場面までは、物語はコールハースの行動を中心に展開している。しかしこの会話の場面以降、物語はコールハース以外の人物の行動も詳しく追うようになる。この筋の変化、言い換えると物語の視点の変化を伴う物語内容は、コールハースによるユンカー、フォン・トロンカに対する復讐劇以外の要素を持ち始める。コールハースはルターの協力によって彼が犯した罪に対する大赦をザクセン選帝侯から得る。しかしこの大赦はザクセン側の策略によって破棄されることになる。これをきっかけとし、コールハースはザクセン選帝侯に対しても復讐を誓う。これ以降コールハースが復讐を誓っている人物は二人になる。そしてコールハースを処刑しようとするザクセン側に対抗し、彼を救うために彼の領主であるブランデンブルク選帝侯が現れる。このザクセンとプロイセンの両者の対立にはコールハースを巡るものだけでなく、その背後にある政治的な対立も含まれている。さらにコールハースがザクセン公国の滅亡に関する予言が書かれている紙切れを所持していることが明らかになることで、彼を処刑しようとしていたザクセン選帝侯もコールハースを救おうとし始める。

このようにルターの会話の場面まではコールハースがヴェンツェル・フォン・トロンカに対して復讐を目指す様に焦点を当てて描かれていたのに対し、それ以降の場面では対立したり、相反したりする様々な思惑や背景が入り交じった複雑な内容へと変化している。この変化を前にするとき、読者はそれまで持っていた物語に対する見通し、すなわちコールハースによる復讐劇とは違う見通しを持たざるを得なくなる。

以下ではこの変化について詳しく見ていくことにする。

4) 『コールハーゼ』から『コールハース』へ

自分の訴えが退けられたことが原因となって、古記録のコールハーゼは武器を手にするが、コールハースが武器を手にする決め手となるのは妻の死だ。この段階から既に、古記録『コールハーゼ』と物語『コールハース』との間に違いが生じている。コールハーゼとコールハースに暴動を決意させる決定的な要因そのものは違っていても、彼らは自分の馬を奪ったユンカーと、自分の訴えを退けたザクセンを相手に戦いを繰り広げている。ところが、コールハースが自分を「神にのみ従う者」と見な

し、また「大天使ミヒヤエルの代行者」と呼ぶようになると、彼の振る舞いは歴史上のコールハーゼ以上に激しくなっていく。

一見、両者は同じ目的のために行動しているように見えるが、実はそうではない。これと同じ特徴はルターへの振る舞いにも引き継がれている。古記録と『コールハース』のどちらのルターもコールハーゼ、コールハースの狼藉を止めようとするが、古記録でルターはコールハーゼの懺悔を聞き、正餐を与え、彼の狼藉を止めることに成功する。しかしザクセンに対する仲裁は実らず、結果としてコールハーゼは狼藉を働き続けることになる。一方、『コールハース』のルターはコールハースを一方的に糾弾し、彼の懺悔と正餐を求め頼みを利用することで、その狼藉を止めようとするが、これは失敗に終わる。だが、彼が大赦を得られるようにザクセン選帝侯に働きかけることで、コールハースとザクセンとの仲裁を成功させ、結果として彼の狼藉を止めることには成功する。ここでも両者は狼藉を止めるという同じ目的のために行動しているように見える。しかし、その内容だけでなく行動の結果までもが一致しなくなっている。

物語序盤から「第二幕」に至るまで、コールハース（コールハーゼ）がユンカーに不当に馬を奪われ、しかも厳しい労働によって台無しにされたため、その馬に対する損害賠償を合法的に求めるが退けられ、最終的には非合法的手段、暴力に訴えるという骨子において両者の物語は共通している。この共通性は「第二幕」が展開するに連れて失われていき、自らを「大天使ミヒヤエルの代行者」と呼んでいるコールハースの布告と、彼とルターとの会談の場面を経ることで限りなく失われている。この場面以降、古記録には見られない内容が物語の結末まで繰り広げられる。

3. 不明瞭になっていく見通し

1) 死刑か死刑回避か

余ザクセン選帝侯は、マルティン・ルター博士が我々に発した仲裁に対して特に寛大な斟酌をし、ミヒヤエル・コールハース、ブランデンブルクの馬喰に対して、三日以内に彼が手にした武器を捨てるという条件の下、彼の案件を新たに審理するために、ドレーズデンへの自由なる護送を与える。予期されぬ事ではあるが、この者がドレーズデンの最高裁判所において黒馬に関する彼の訴訟を拒絶するような場合には、自らの行為に正当さを与えんとする独善的な企ての廉で、この者は法の完全なる厳格さによって処罰されることになるであろう。しかし反対の場合には、この者には仲間共々寛大なる許可が与えられ、この者がザクセン領内で働いた狼藉に関しては、完全なる大赦が与えられることになるだろう。¹⁸⁾

ルターによる仲裁によって、コールハースはザクセン選帝侯から彼がザクセン領内で働いた狼藉に対する大赦を得る。物語冒頭部分から、コールハースは彼が犯した罪のために処刑されることになるだろうという見通しを読者は持つ。ここで大赦が下されることにより、この見通しに反する要素が読者に

提示される。彼に処刑とは正反対の要素である大赦が下されると、彼が徒党を組んで狼藉を働いていたところの部下であったヨハン・ナーゲルシュミットが現れ、ザクセン領内で再び略奪を開始する。するとコールハースと敵対しているザクセン側では、これを機に再び、何とか彼を罪人に仕立て上げようとする。果たして彼らの計略に乗せられ、コールハースが再び罪人として裁かれることになると、今度は「皮剥人の真っ赤に焼かれた鉗子に挟まれ四つ裂きにされ、その体は車裂き用の刑車と絞首台の間で焼かれるものとする」¹⁹⁾との判決を受ける。

大赦を受け、命を救われるかと思われたが、再びコールハースに死刑判決が下される。この時点で既に死刑と助命の間で数度揺れ動いている物語の筋は、再度助命に向かって揺れ戻る。

彼に死刑判決が下されると、その命を救わんと彼の領主であるブランデンブルク選帝侯が登場するのである。コールハースを救うために、彼が住んでいた村を管轄区に含む都市の市長をしていたハインリッヒ・フォン・ゴイザウが、新たにブランデンブルクの宰相に任ぜられる。その宰相ゴイザウがコールハースの引き渡しをザクセン公国側に要求する。

ブランデンブルク選帝侯はコールハースをザクセン側から救おうとする。この展開から、読者はコールハースの死刑が回避されるのかと再び期待するが、コールハースの死刑回避を良しとしないザクセン側の抵抗によって、コールハースは帝国の平和を乱した廉でウィーンの皇帝に訴えられ、それにより絞首刑に処されるであろうという結末が読者に示される。助命に向かってきた筋は、ここでもう一度死刑に向き直っている。

コールハースが妻の死をきっかけにして武器を取り、ザクセン領内を荒らし回ったことは既に触れたが、彼が復讐劇を開始するより前に、あるジプシー女からザクセン公国の滅亡に関する予言を書いた紙切れをもらっていたことが明らかにされる。その紙切れを手に入れるため、今度はコールハースを皇帝に訴えさせたザクセン選帝侯までもが彼の命を救おうとし始める。またしても物語の展開がコールハースの助命に向かう。彼を滅ぼそうとしていた者自身が彼を助けようとし始めることによって、物語はコールハースの死刑と助命の間で揺れ続ける。これによって我々読者が持つ見通しをも揺れ動かすのである。しかしベルリンにおいてコールハースは、結局、帝国の平和を乱した廉で死刑を言い渡される。

物語がコールハースの処刑という冒頭で予期しうる結末に向かって展開していこうとしている一方で、この展開に全く反対する要素、コールハースの助命の可能性が、未だ尚、読者に対して示される。それでも最後には、コールハースは読者の見通し通りに処刑される。以下で見る最後の死刑と助命の間における結末に対する志向の揺れは、それまでのものとは違っている。

判決が寛大なものであったにもかかわらず、事がこうも複雑になった状況では、その判決の執行を信じる者は誰もいなかった。確かにベルリン全体が、選帝侯がコールハースに対して抱いている好意のために、その大命によって間違いなく単なる、おそらく面倒であり、また長期に及ぶ禁

固刑に変更されると期待した。²⁰⁾

このように、コールハースの助命が期待される中で彼は死刑に処される。これまでは死刑と助命の間で揺れていた展開が、助命の可能性を含みつつ、一気に死刑に向かって進むという最も激しい揺れ方をしている。こうした全く反対の要素の間での揺れに、読者は先の展開を見通すこともできず、ただ従うしかないのである。

こうした揺れは正反対の要素だけに限らず、コールハースの復讐の対象についても起きている。

2) 復讐の対象

前節ではコールハースの処刑に関する物語の展開の揺れについて見てきた。この節では、彼が復讐しようとする対象もまた変化している点を見ていく。

我々は既に、コールハースが彼から不当に馬を奪ったユンカー、ヴェンツェル・フォン・トロンカに対して訴えを起こし、これを契機に物語が展開していくのを見た。ここから、コールハースとヴェンツェルの間の闘争が物語の核だと考えられる。ところが、我々が物語の核であると見なしうる彼らの間の闘争さえも、『コールハース』においては、しばしば不確かなものに見えてくる。

コールハースはヴェンツェルを捕らえて、彼が自分から奪い、やせ衰えさせた黒馬を元通りに肥え太らせた後、自分に返却させようとしている。そのために立ち上がったコールハースは、諸都市を襲い、灰燼に帰せしめながら、ユンカーを追う。ルターの仲裁により、コールハースの罪には大赦が与えられ、黒馬に関する訴訟が再審理されることが決定する。この黒馬は彼がユンカーを襲撃して以降行方不明になっていたが、当局の捜索によって発見され、その要請によってドレスデンに連れてこられる。ところが、その馬は今にも死んでしまいそうに見えるほどやつれ果てている。その馬が自分の馬であることを確認すると、コールハースが当初ユンカー、ヴェンツェルに対して持っていた黒馬に関する決意は次第に挫けていく。さらに、かつての手下ナーゲルシュミットの登場により、再び暴動を起こそうとしているのではないかという疑いを当局からかけられていたコールハースは、ついに彼に与えられていた大赦の破棄を告げられ、「自分が巻き込まれている事件から自分を救うことができるものはこの世に何一つとしてないことを全く承知していた」²¹⁾ので、ついに「黒馬を肥え太らせることを、悲嘆に屈した彼の心が [...] 諦めてしまった。」²²⁾

このようにはっきりとコールハースが当初の目的を断念したことが書かれている。これによって、彼の復讐の対象はヴェンツェルから外れ、消失している。この物語の核とも言うべきコールハースによるヴェンツェルに対する復讐劇がこの時点で一度終わっている。これは物語の根幹を揺るがしかねない大転換だ。それにもかかわらず、物語はさらに続いていく。その中で復讐の対象が変化し、コールハースにはザクセン選帝侯に対する復讐を果たそうとし始める。

既に見たように、コールハースを救うためにブランデンブルク選帝侯が登場し、彼をザクセンから

救い出す。さらに、ジプシー女が「お守りだよ、コールハース、馬喰よ。大事に仕舞っておくんだ。このお守りがいつかお前の命を救うことになるだろう」²³⁾ と言ってコールハースに手渡したザクセン公国の滅亡に関する予言が書かれた紙切れを彼から手に入れようと、ザクセン選帝侯までもが彼の命を救おうとする。

予言の書かれた紙切れを手に入れるまでは、ザクセン選帝侯の持つ強大な政治的権力の前に屈さざるを得なかったコールハースだったが、ザクセン選帝侯の持つ権力に対抗する力を持つ紙切れを手にすることで、コールハースは自分が受けた仕打ちに対する報いを選帝侯に受けさせることができるだけの力も同時に手にしている。

可能であればどんな犠牲も全く喜んで払う覚悟をしていたときに、ドレースデンで受けねばならなかった、卑劣で君主らしからぬ処遇を忘れていない馬喰は、紙切れを手放す気は無いと言った。紙切れと交換に、自由と命ほどのものをお前に与えようとしているのに、何がお前をこんな奇妙な拒絶をさせるのだという主猟官の問いに対し、コールハースは「主猟官殿、もしあなたの領主がやって来て、『私は私の支配を助ける全ての家来と共に滅びるつもりだ』と言ったとしても、――滅びるですよ、分かりますか。それがまさに私が心に抱く最も大きな望みなのです。そうして私は、御主君にとってはその存在以上価値のある紙切れを渡すことを拒み、こう言ってやるのです。『お前は私を死刑台へ連れて行くことができる。しかし私はお前に苦痛を与えることができる。そうしてやるからな』」と答えた。²⁴⁾

ここでコールハースの口からザクセン選帝侯に対する復讐心が明らかにされている。このとき、復讐の対象は明確にザクセン選帝侯に変わっている。なぜコールハースがヴェンツェル・フォン・トロシカではなくザクセン選帝侯にこれほどの憎悪を持つことになったのかについては、コールハースの口から明らかにされている。

その他にも彼（コールハース）は、自分のした経験によると、誰が自分を新たな騙しから庇ってくれるのか、分けても重要なのは、リュッツェンに集めた軍団を選帝侯のために犠牲にしたように、紙切れを無駄なやり方で犠牲にしろということなのかと問うた。彼は「一度約束を破った者とは、私は二度と約束を交わさない」と言った。²⁵⁾

以上のコールハースの発言からも見て取れるように、彼はザクセン選帝侯が彼と交わした約束を違え大赦を破棄したことに強い憤りを覚えており、それが選帝侯に対する憎悪へと変わっているようだ。²⁶⁾

黒馬に対する訴えを断念し、復讐の対象がザクセン選帝侯に変わったと思われていたが、ベルリン

で帝国の平和を乱した廉で訴えられたことに対して異議を唱えるコールハースは、ヴェンツェル・フォン・トロнкаに対する彼の訴えに対しては、ドレースデンから彼に完全なる賠償が与えられることを聞くと、「極めて早く (sehr bald)」自分の罪に対する罰を進んで受け入れる。訴えを諦めたことが明確に示されていたにもかかわらず、ここで彼が自分の処罰と引き替えにヴェンツェルに対する復讐を果たそうとする姿勢が描かれている。復讐の対象がザクセン選帝侯に変わったと思われたが、そこに再びヴェンツェルが加えられることで、コールハースが成し遂げようとしていたことが極めて分かりづらくなってしまふのである。

「さあ、コールハースよ、今日こそお前が自分の権利を得る日だ。見よ、ここに余は、お前がトロンケンブルクで無法なやり方によって失ったもの、そして、余がお前の領主としてお前に再び与える義務のあるもの、黒馬、ネッカチーフ、貨幣、下着、ミュールベルクで倒れたお前の牧童ヘルゼの治療費に至るまで、あらゆるものをお前に返す。これで満足か。」——その間にコールハースは宰相の合図によって彼に手渡された判決文を、目を大きく見開き、輝かせて読みながら、腕に抱いた二人の子供を地面に下ろした。そして、判決文の中にユンカー、ヴェンツェルが二年の禁固刑に処されるという項目までも目にしたとき、彼は遠くからではあるが、様々な感情に完全に衝き動かされ、両手を胸の上で組んで、選帝侯の前に跪いた。そして立ち上がり、手を膝の上に置きながら、宰相に、この世での最大の望みが果たされましたと嬉しそうに確言した。²⁷⁾

ここからはコールハースの復讐の対象がやはりヴェンツェルであったことがわかる。ところが、彼はザクセン選帝侯に対しても復讐を果たす。

コールハースが首に巻いていた布を取り、胸当てを開いたまさにそのとき、民衆の輪をちらと見た彼は、自分からそう遠くないところに、二人の騎士の間に体を半分隠している青と白の羽根飾りを付けたよく知っている男（ザクセン選帝侯、筆者注）を認めた。コールハースは素早い、彼を囲む護衛たちに怪しまれるような足取りで彼らから離れ、その男の目の前へと歩いていった。胸から箱を取り、その中から紙切れを取り出し、封を開け、それを読んだが、その間も目は青と白の羽根飾りの男から動かさなかった。その男は既に淡い期待を抱き始めていたが、コールハースはその紙を口に入れ、飲み込んだ。これを見たとき、この青と白の羽根飾りの男は痙攣し、気を失って倒れた。驚いたその男のお供が屈み込み、彼を地面から抱き起こしている間に、コールハースは処刑台へと向いていた。そこで彼の首は執行人の斧の下に落ちた。²⁸⁾

このように、コールハースはザクセン選帝侯に対しても復讐を果たす。つまり、彼の復讐の対象はヴェンツェルだけでなかったのだ。

死刑と助命の間で展開が揺れ動くのと同じように、復讐の対象もまたヴェンツェルに向いているが、それは一度消失する。その後再び彼が復讐の対象になり、さらにザクセン選帝侯の間で揺れている。物語の筋が助命の雰囲気を含みつつ、しかし一気に死刑に向かうのと同じように、復讐の対象もまたヴェンツェルへ向きながらザクセン選帝侯にも向いている。このような物語中の要素が正反対の要素の間で揺れ動いたり、二重になっているために、我々読者は物語に対して一定の見通しを持つことができないのである。

3) 作家の性質か小説手法か

ここまで『コールハース』において読者が一定の見通しを持つことを妨げられる要素のいくつかについて見てきた。ここである問題に直面する。それはこの要素が作家の性質によるものか、それとも小説手法であるのかというものである。確かに作家が意図的に読者の見通しを不明瞭なものにしていると考えることもできる。だが、クライストが意図的にこうした効果を狙っているとは考えにくい。なぜならば、『コールハース』中に見られる一つの誤りから、彼の物語執筆に際しての慎重さに疑問を抱かざるを得ないからである。その誤りを以下に示す。

コールハースは妻の死をきっかけとし、ユンカー、ヴェンツェル・フォン・トロンカに復讐するために彼の故郷を離れる。コールハースは妻の葬儀後ヴェンツェルに対し馬の原状回復及び自分のもとへ輸送してくるよう書状をもって請求する。さらにヴェンツェルがその書状を見て三日以内に彼の請求を実行するように期限を設けている。期日が過ぎても何の音沙汰も無いために、コールハースはユンカーの居城を襲う。

このように少なくとも妻の葬儀後三日は経ってからコールハースは彼の故郷から出発している。しかし、彼がジプシー女から予言書を手に入れたときのことを話している場面では、葬儀から出発までの時間が「妻の葬儀を済ませたちょうど翌日」²⁹⁾と変わっている。既に紹介したように、コールハースが彼の故郷から発つ場面までが1808年に断片として発表された部分である。それ以降の部分は1811年の『小説集』に収められている。この出発時期の誤りが執筆時期の違いから生まれたのではないかと考えることもできる。しかし、ある期間に集中して書いている他の作品でもこのような誤りは見られる。³⁰⁾ この点から、この誤りの原因を執筆時期に求めることは難しいだろう。

それではクライストが推敲せずに作品を執筆しているのではないかと考えられるが、それは無いと言っても言い過ぎではないだろう。なぜなら、彼は言葉に対しては、かなり慎重に推敲していることが窺えるからだ。作品や手紙の中で用いる表現の中には、彼が好んで何度も使っているものがいくつか見られる。³¹⁾ 言葉で表現できるものに限界を感じていると言っていることから、彼が言葉の使用法や表現については慎重であったと推測できる。³²⁾

こうした点から、クライストは言葉や表現に対しては慎重であるが、物語そのものに対しては同じような慎重さを持っていなかったと考えられる。そのために辻褄が全く合わないということが起こる

のだろう。

彼の言葉や表現に対する慎重さと物語を矛盾無く進めていくために必要な慎重さの不足を比較すると、読者の見通しを一定させない要素もまた、彼の性質、特徴から生まれたものであり、小説手法として意図的に生み出されたものではないと考えられる。

4. 見通せない世界

大赦が与えられたり破棄されたりすることで、コールハースが処刑されるのか、それとも助命されるのかという間で物語の展開は揺れ動いている。これに従って物語の結末に対する我々の見通しもまた何度となく変化を強いられ、次第に不明瞭になっていく。さらに『コールハース』において重要な問題の一つであるコールハースの復讐の対象も、同じように一定していない。物語序盤でユンカー一人だけであった復讐の対象は物語の展開に連れて次第に変化し、結末部でその対象は彼とザクセン選帝侯の二人になっている。このように物語の重要な要素さえも変化することで、我々の物語に対する見通しはより不明瞭になっていく。

一般に『コールハース』は悲劇だと解釈されることが多い。確かに最後にコールハースが処刑される点を見れば、この作品は悲劇作品であるとの解釈を可能にするだろう。しかし、彼が処刑直前にヴェンツェルに対して復讐を果たし、本懐を遂げた後に処刑されている点も考慮すると、この作品を悲劇作品であると断じることはいささか行き過ぎであるように思われる。もしコールハースが復讐を果たすことなく貴族の権力に蹂躪されたまま処刑されているのであれば、この作品は間違いなく悲劇作品と見なされねばならない。だがコールハースが「この世での最大の望みが果たされましたと嬉しそうに(傍点筆者)」言っているのだから、この作品はいわゆるハッピーエンドを迎えているとさえ解釈できる。³³⁾

物語の展開や雰囲気は紛れもなく悲劇作品のものであるが、ハッピーエンドとさえ思える結末を迎える。このような全く相反する要素を内に含んでいることもまた、この作品が持つ見通しの悪さを助長していると言えるだろう。

以上の物語に見られる特徴を人間クライストに結びつけるならば、そこには次のような彼の姿を見ることができるのではないか。

作品の執筆中に自分の才能に絶望し、その原稿を焼き捨てたり、自分の願いを聞き入れてくれない婚約者に対して突如別れを告げたり、親族に侮辱されたと思いきみ死を決意したりと、クライストの思考の振れ幅は常人よりも幾分大きいように思われる。極端から極端へ、生か死か、これがクライストの生き方であった。彼は若い頃から二つの全く相反する原則に苛まれる中にあっても、自分の道徳的成熟を神聖な義務だと考えていた。当初、自分の敵を赦すかそれとも誅するかという相反する原理の中で悩むコールハースの姿には、このクライストの思想が垣間見られる。妻の死をきっかけとして暴徒と化すコールハースの姿にもまた、クライストの極端から極端へと走る激しさを見ることができ

る。歴史家、政治家でクライストの友人でもあったフリードリッヒ・クリストフ・ダールマンの証言にもあるように、「コールハースの中にクライストの性格が忠実に反映している」³⁴⁾と考えられる。

注

本文と手紙の引用は全てHeinrich von Kleist Sämtliche Werke und Briefe Band 1 u. 2, hrsg. von Helmut Sembdner, München 1987 (dtv klassik 5925) による (以下SWB-Mとする)。

*) ゲオルク・ルカーチによると「全ての人間の慰めの無い孤独、世界と世界におけるあらゆる出来事の絶望的な見通しの悪さというものが、人生と文学におけるクライストの悲劇の雰囲気である (Die trostlose Einsamkeit aller Menschen, die hoffnungslose Undurchsichtigkeit der Welt : das ist die Atmosphäre der Kleistschen Tragödie im Leben und in der Literatur.)」 (Georg Lukács, Deutsche Literatur in zwei Jahrhunderten, Neuwied/Berlin 1964, S. 202.)。

ルカーチは、クライストがその非社会的な性格ゆえに感じていたと推測される孤独感、そして彼の中のニヒリズム、さらには「死の恐怖と死への憧れのクライスト的混在」(S. 207.) が生んだ、いわゆる「カント危機」を経験し、人生最高の目標を失うことで陥ったとされる空虚さに上記の根拠を求めている。そして、これらの要素をクライスト自身と彼が創造する人物たちの特徴と見なしている。

クライスト悲劇観は孤独や絶望、虚無という否定的な要素に支配されているとルカーチは考えている。そのため、彼はクライスト自身と彼の作中の登場人物たちに「死への憧れ」を見る。彼の主張する「世界と世界におけるあらゆる出来事の絶望的な見通しの悪さ」の中には、クライスト自身と彼の作中の登場人物たちが孤独や絶望から生じる死への憧れのために、生へと目を向けることができない様子が窺える。

従来より悲劇作品と考えられている『コールハース』でも、こうした「見通しの悪さ」が感じられる。その根拠は、ルカーチが言うところの「排他的な、全ての人間を焼き尽くして破滅へと追いやる情熱」(S. 222.) に求めることができる。なぜならば、この「情熱」もまた、ある種の「死への憧れ」と考えられるからだ。しかしルカーチの主張に見られるほど、コールハースはただ破滅や死へ向かって真っ直ぐに進んでいるわけではない。確かに結末だけを見れば、彼は敵に破滅をもたらし、そして自身も処刑されている。だがここに至るまでの間、彼は破滅や死へと向かう情熱とは正反対の情熱も抱き、その間で葛藤している。これと関連して、物語の顛末や全体像に対して読み手が持つ見通しもまた悪くなる。本稿では、読み手のこの「見通しの悪さ」を問題としている。

1) SWB-M, Bd. 2, S. 9.

2) Klaus-Michael Bogdal, Heinrich von Kleist: Michael Kohlhaas, München, 1981, S. 14.

3) Franz M. Eybl, Kleist-Lektüren, Wien, 2007, S. 196.

4) Wolf Kittler, Die Geburt des Partisanen aus dem Geist der Poesie. Heinrich von Kleist und die

- Strategie der Befreiungskriege, Freiburg in Br., 1987, S. 301.
- 5) Heinrich von Kleist Sämtliche Werke und Briefe in vier Bänden, hrsg. von Ilse-Marie Barth, Klaus Müller-Salget, Stefan Ormanns und Hinrich C. Seeba, Frankfurt am Main 1990, S. 728. (以下、SWB-Fとする)
 - 6) Bogdal, S. 13.
 - 7) SWB-M, Bd. 2, S. 20.
 - 8) SWB-M, Bd. 2, S. 30.
 - 9) ミュラー=ザルゲートによれば、『コールハース』を舞台作品と見なそうとすると、全体は五幕に分けることができる。第一幕は「フェーブス断片」の部分、第二幕がコールハースのドレスデンにおける暴動からルターとの会談まで、第三幕はほとんどドレスデンで展開され、コールハースに与えられた大赦の破棄まで続く。ブランデンブルク選帝侯のコールハース引き渡し要求からジプシー女が彼の牢屋を訪れるまでが第四幕、そこから紙切れを巡る混乱が第五幕を形成している。(SWB-F, Bd. 3, Bd. 3, S. 719 f.)
 - 10) SWB-M, Bd. 2, S. 32.
 - 11) SWB-M, Bd. 2, S. 36.
 - 12) SWB-M, Bd. 2, S. 36.
 - 13) SWB-M, Bd. 2, S. 41.
 - 14) Klaus Müller-Salget, Heinrich von Kleist, Stuttgart 2002, S. 203 f.
 - 15) Ebd. S. 203.
 - 16) Erläuterung und Dokumente. Heinrich von Kleist, Michael Kohlhaas, hrsg. von Günter Hagedorn, Stuttgart 1976, S. 62.
 - 17) Müller-Salget, S. 204.
 - 18) SWB-M, Bd. 2, S. 53.
 - 19) SWB-M, Bd. 2, S. 77.
 - 20) SWB-M, Bd. 2, S. 94 f.
 - 21) SWB-M, Bd. 2, S. 76.
 - 22) SWB-M, Bd. 2, S. 76 f.
 - 23) このジプシー女のモチーフに関しては、ミュラー=ザルゲートによると、このジプシー女のエピソードは「クライストの多くの同時代人から、邪魔なロマン主義風な付け足しとして批評されている」(Müller-Salget, S. 206.) とあるように、従来から批判的な意見が散見される。例えばクライストの愛読者であり、ある時期『コールハース』を常に持ち歩いていたと言われているフランツ・カフカは、この作品を「もし、この比較的弱い、部分的に粗く書き下ろされた結末でなかったならば、これは完璧なもの、私がこんな作品は存在しないと進んで言うような完璧な作品であったでしょ

う)』(Heinrich von Kleists Nachruhm, hrsg. von Helmut Sembdner, München 1997, S. 372.と評価している。

24) SWB-M, Bd. 2, S. 86.

25) SWB-M, Bd. 2, S. 98.

26) ザクセン選帝侯が復讐の対象となる点には、クライストがザクセン選帝侯をプロイセンに対するナポレオンの同盟者として出したのではないかと考えられている。(vgl. Curt Hohoff, Heinrich von Kleist, Hamburg 2002, S. 119.)

27) SWB-M, Bd. 2, S. 101 f.

28) SWB-M, Bd. 2, S. 102 f.

29) SWB-M, S. 82.

30) クライストの処女作『シュロップフェンシュタイン家』では、相手の名前を知らないはずの人物が相手の名前を口にしたり、刺し殺し、引き抜いていたはずの剣が、まだ死体に突き刺さっていたりするなどの誤りが見られる。

31) 一例として、以下に示す榿の木のモチーフが挙げられる。

Freilich mag | Wohl mancher sinken, weil er stark ist. Denn | Die kranke abgestorbene Eiche
steht | Dem Sturm, doch die gesunde stürzt er nieder, | Weil er in ihre Krone greifen kann.
(V. 959-963.)

確かに多くの者は力強いがために倒れることもある。なぜなら、病気にかかって枯れている榿の木は嵐に耐えるが、丈夫な榿の木は、嵐がその梢につかみかかることができるから、かえって吹き倒される。

上の引用は『シュロップフェンシュタイン家』のものであるが、このモチーフは、『ペンテジレーア』でも極めてよく似た形で用いられている。

Sie sank, weil sie zu stolz und kräftig blühte! | Die abgestorbene Eiche steht im Sturm, | Doch
die gesunde stürzt er schmetternd nieder, | Weil er in ihre Krone greifen kann. (V. 3040-3043.)
彼女(ペンテジレーア)はあまりに誇り高く、あまりに力強く咲き誇ったために倒れたのだ。枯れた榿の木は嵐の中で立っているが、丈夫な榿の木は、嵐がその梢につかみかかることができるために、激しく吹き倒されるのだ。

32) 1801年2月5日付けで姉ウルリケに宛てて書いた手紙には「[...] 我々が所有している唯一のもの、言葉でさえそのためには役立ちません。言葉は魂を描けないのです。言葉が我々に与えるものは、

切れ切れの断片だけなのです。」(SWB-M, S. 626.) とある。

33) 「[...] 見かけ上は和解的で、実際にはイロニーによって変容された解決を『ハッピーエンド』に向けられたパロディーと呼ぶことができるだろう。」(Müller-Salget, S. 210.)

34) Heinrich von Kleists Lebensspuren, hrsg. von Helmut Sembdner, München, 1996, S. 301.